

である。斯くて何人もその欺瞞に氣附く事はなく、建物本來の目的の跡を少しも残さずに、抹削し得たものと考へたのである。然し、決して何人も一切に考へ及ぶものではない。バイヨンの第三階をなしてゐる所は、夙に修理を經てゐるのである。之は、中央塔の非常な重みに堪えない事を氣遣つたものか、其の土臺をば、最初の設計よりも遙かに擴けてあり、其の縁は、下の第二階の歩廊の彫刻を施してある正面や破風に接するまでになつてゐる。斯くて一の破風は全然隠れてゐたので、濕婆教徒の系統的に行つた破壊を免かれたのである。最近之を取出したが、之には、四臂のローケーシュブラの頗る鮮かな像がある。而して夫々の手に、傳承的持物である珠數、書物、紅蓮、瓶を持つてゐる、頭髻の前方に思惟佛阿彌陀の明確な姿がある。他方、アンコール・トムの四隅に建てた四寺に遺つてゐる破風にも、ローケーシュブラの同様に特徴のある像があるのであるから、城市の中央寺院のみならず、城市自身も、元來は佛教の祈願で建てられたものといふ事になる。

之を知るのはいゝが、最も諸君に興味のある實際的結果は、かのバイヨン